

蝦夷風俗彙纂後編

四

76

460

14



門ヲ号6
號 460
卷 814

蝦夷風俗彙纂後編卷四目次

○耕漁

稗蕪菁類耕作の事

麻を作る事

夷女畑作の事

キナ並厚子と織法の事

夷女厚子皮と製する事

ソキサニを製し紡績する事

鮭鮓等漁業の事

川漁子犬と使用する事

目次

後編卷四



イシヨニと以て海豹と捕る事

ヤスと以て魚を突く事

牡父魚を捕る事

脰胸臍魚の事

キナンボイ魚と漁する事

蝶鮫の事

漁獵時節の事

昆布刈時の事

氷海漁獵の事

○獸獵

獵夷風谷他郡山獵の事

桶と以て狐と捕る等事

夷女獸獵の事

穴熊と捕る事

鷲と捕る事

夷家鳥獸と飼ふ事

山獵ノ犬を使ふ事

鹿種類の事

唐太産業ノ事

唐太産業ノ犬を使ふ事

蝦夷風俗彙纂後編卷四目次終

六 蝦夷の耕作
七 蝦夷の漁業
八 蝦夷の畜産
九 蝦夷の工業
十 蝦夷の商業
十一 蝦夷の交通
十二 蝦夷の宗教
十三 蝦夷の風俗
十四 蝦夷の言語
十五 蝦夷の文字
十六 蝦夷の藝術
十七 蝦夷の科學
十八 蝦夷の醫學
十九 蝦夷の法律
二十 蝦夷の政治
二十一 蝦夷の經濟
二十二 蝦夷の社會
二十三 蝦夷の文化
二十四 蝦夷の教育
二十五 蝦夷の衛生
二十六 蝦夷の體育
二十七 蝦夷の音樂
二十八 蝦夷の繪畫
二十九 蝦夷の文學
三十 蝦夷の歷史

蝦夷風俗彙纂後編卷四

○耕漁の事
○稗蕪菁類耕作の事
夷人此食を鳥獸魚此肉を専らふ用ふといつども不
毛の地にして禾穀の類はたえて生ずる事なしとい
ふも冬阿らば亦禾穀此類をたえて食する事なしと
いふも阿らばこゝみアユウシアマ、といふもの
有り。是かハち稗の一種にして烏禾此類なり。是を蝦

夷の内。何處の地にても作_りて。糧食此一助とな_る事あり。

但極北此地。根室并國後島などの夷人のごとき。かゝる物作る事阿ら_ず。是をひとしく蝦夷地なりといへども。殊_に邊辟たる_ふ。その關_{ヒラケ}たる事もおそくして。未_だかゝる物など作るべきわざハ。志る_ふ及ばざるゆゑなり。絶て禾穀の類_ハ生ぜ_{ざる}地といふ_ふハ非_ず。此_れで_は本邦の人_ハ此_に行_つて住居_{する}も此_を。麥阿る_る。菜大根等を作る_ふ。よく生熟_{する}事あり。

其アユウミアマ、とハ。アユを刺をいひウシを在る_る。或いひアマ、と穀食の通稱_ふして。刺_ハ阿る_る穀食といふ事なり。古の稗_ハ穂_ふを。刺の多く阿る_る故_に斯_をいへるなり。夷人_ハ此_を傳言_{する}るところハ。古の國關_けしを。はじめ。天より火_ハ神降_りて給_ひて。此種_をを傳_へたまへり。そ_をよりしてかく作る事_もなりたるよしあり。然る故_に是を尊_ぶこと大_かとなら_ば。其作り立_るより。食_{する}ふ至_るまで此_をぎ。こと_も心_を用_るなり。其委_{しく}ハ次々_にい_ふ。是より出_たる糠といへども。ただ_は此_を捨_る事阿_らず。其捨_る所_を。家の側_に定め置_く。

ルクタウニカモイと稱して。神明の在るところとれし。尊みたく事なり。此稗を奥羽兩國及び松前の地ふてを。まれふ作るものありて蝦夷稗と稱す。外の穀類ふを似せ。地の肥瘠ふかくをらばして。よく生熟し荒凶の事れしといへ。其蝦夷稗と稱する事。本邦此地ふをなきものふて。蝦夷地より傳へ來るふよりて。かく稱するといふ事ふをあるべのらば。是れ本邦禾穀此うちふかんぐふるふ。今いふ田稗なるべし。田稗といへる物。田のみふ限らば。すべて庫濕ヒシツの地ふを。植る事をまことせして生熟するものなれば。今世

の人々。たゞよのつ稱此野草と。同じ事此やうふたぼえたる事なり。されど上古のとき。禾穀の類此いまご豊饒ならざりしふを。六れらの類をち作て用ひたる事なるべし。其後禾穀此類ゆゑらふなりしより。自らこれら此類を麤細コホなるものとして作る者もあく。たゞ奥羽ならびふ松前等の邊地ふて此を。稀ふ作る事ふをなりたるともなり。蝦夷稗此名を得たる事を。今ふ及びてを。ちつぱら蝦夷地ふて此を。作て用ふる事よりして。たのづからかゝる名を。唱ふるなるべし。其形のごときまさしく。田稗と露たぐふ事なし

といふふも阿らねど。あまゝ人此手ふよりて。其生熟
此性を遂ると。たゞ原野荒草此うちふ混じて生さる
ふよりて。自ら形ふ少しくかされるさま此阿るなる
べし。志りりといへども。ひとしく稗此一種ふして。本
邦此地ふても生じ。蝦夷此地ふも生さといへる事也。
いさゝり疑ふべき事ふ阿らね。是のみふ非也。近き頃
ふ至りてハ。蝦夷此うち極北此地ふ阿らざるところ
也。粟稗大根菜等を本邦の人より傳へて。作る夷人こ
とふ多し。

蝦夷のうち。尻岸内といふ所より。沙流といへる所

ふまでの夷人。ことごとく作る事なり。よつて。夷人の
是を糧食ふ供さる事也。よのつねの魚鳥の肉等も。比
さべきものふ阿らねといひて。其尊び重んぶる事
甚厚し。凡そ此らの事よらん。いふんぞ蝦夷の
地ふも。禾穀此類の生さる事れく。蝦夷の人を禾穀此
類を。食さる事なるとやい云べき。同前也。姑まよ
ラタネと稱さる事也。ラタネキ子といへるを略せる
の言葉なり。ラとをさべて食さる草此根をいひ。タツ
キ子とを短き事をいひて。根短しといふ事なり。是を
此草此形ふよりてかゝる稱さるなり。是亦國此開け

し初め火の神降りたまひて。アユウシアマ、と同じく。傳へ給ふよしいひ傳へて。殊の外に尊み。蝦夷のうち何きの地ふても作りて。糧食に助けとなす事也。但極北に地。根室并國後島等の夷人作る事のなきを。アユウシアマ、ふ論じたと同じき故と志るべし。

是れ本邦菜類に内ふ考ふるふ。則蕪菁は一種あり。食するふ根葉ともふ用ふる事。全く蕪菁と異なる事なし。味も又同じ。夷人のいひ傳ふる所也。此菜肉まのつ祢の草といふ事かをりて。聊ち毒に氣れしとて。疾病の

人といへども。此菜に限りてを心を置きて。食せしむる事なり。是べて蝦夷にうち極北の地ふ何らざるあひだ。土地の美惡よか。はらび。作られたまはれば。よく生熟する事なり。多く作る事も何らんふ。荒凶にとしに備へとなさん。便せれるべし。

右に二種を蝦夷に開けし初めより。自然に生じたる所にして。外より傳はり植ふる物も非び。此うちアユウシアマ、を。穀類に一種にして。ラタ子を菜類の一種なり。是ふより考ふるふ。後來に及び人民蕃殖し。耕耘に力を致し。稼穡に務を盡す事何

る小至らん小。禾穀菜草此類森然として。蝦夷此
地小生せん事も未だるべあらば。

右二種此ものをつくるを。皆て稱してトイタとい
ふ。トイタ土をいひ。タをほる事。或いひて。土城堀ると
云ふ事なり。又一つ小をトイカルと云いふ。トイタ上
小同じく。カルを造る事をいひて。土を造るといふ事
なり。二つとも小本邦の語小して。なほ耕作などい
せんがごとく。まゝチヤウホ場圃ハタケなどいせんが如し。

耕作と場圃と。殊小かそりたる事なるを。かくい
へるもの。皆て夷人此境上古此さま小して言

語のかたも多あらば。為すべき業をまゝ少し。志の
るゆゑ小。この二種のものをつくるがごとき。其作
り立る此事業と稱して。トイタといひ。其作る地
小して。場圃此さま。たると。ころをも。まゝ稱して
トイタといふなり。凡小此ら此事。本邦の事小比し
てハ。論ト難きと。改なり。是より後其言葉を一
して。其事此たがひ向る事ハ。皆この故と云るべし。
夷人のならひ。おれら此事と云ふ。地の美惡をえら
ぶなどいへる事を見え。山中の不平なる地。向るハ
樹木此陰れとをも。トイタと改してつくる事なり。

但地をえらぶ事此なしといへるハ。さだめたる事
よも阿らば。外より打見たるさまをかくみゆきと
も。是べて夷人此性を物事深くかんぐへて。かる
しき事をせせ。されば此等此事も。別ふ意味の
阿りてかくるなせるよや。其義いまご詳ふらば。
トイタとなすべきため。まじをじめ。其地此草を
かる。是をムンカルと稱せ。ムンと草をいひ。カルと
れをち刈事といひて。草をかるといふ事なり。是べて
このトイタ此事も。初め草をかるより種を蒔。其外熟
するよいたひて。刈をさむる等此事も至るまで。多く

は老人此夷。阿るハ女子の夷此業とせる事なり。
草をかるよも。まじ其所よイナヲをさへ。げて。神を
祭る事阿り。其外種をまく此時。阿るも熟するよ及
んで刈収るの時等。おとくく神を祭るの事阿り。い
また其義を詳ふせ。は。
刈たる草をば。そのとろよ阿りめ置て火も焼ぬり。
是をムンウワイと稱せ。ムンと草をいひ。ウワイとや
く事をいひて。草をやくといふ事なり。おれハ草をや
きて。地のこやしとなすといふよも阿らば。たふか
たるまよはて置て。トイタのさまたげとなるゆ

るふかくなは事なり。もし刈る所の草纏りたる事阿
れば。そのまゝ其地はかゝらふ。是て置事もあるな
り。

草を焼てより。其地の土を平らるふならはなり。是を
トイラ、ツカと稱す。トイを前ふ同じくラ、ツカと
は。是べて物を平らるふ是る事をいひて。土をたひら
かふならはといふ事なり。夷人此境耜等此器をな
ければ。地をならはといへる也。本邦ふて隴畝など。耕
作するがごとき此事も阿ら。唯其地ふ阿る木は
根。阿るも土くま等此物の種を蒔さまさげとなるべ

きものを。タシロ等此ものも。きり除くのみ此事な
り。

タシロといへる物也。本邦ふいふ庖丁此類なり。
土をならは事終りて。夫より種を蒔なり。是どヒチヤ
リハと稱す。ヒチは是べて物の種をいひ。チヤリハを蒔
く事をいひて。種をまくといふ事なり。凡トイタ此事。
地の善惡をえらぶといへる事も見え。まゝこや
ふど用ふといふ事もなければ。たゞこの種を蒔事此
み殊ふ心をもちひて。時節をかんがふる事なり。其時
節といへる也。とより曆といふものもなけき。時

日をいつの頃と定め置といふ事ふも阿らさ。唯ふり
つみし雪は消行まふ。山野は草はおほづらら生る
をうかびひて。種を蒔の時節とるな事な里。

さべて夷人の境時候ひとしからば。寒暖は遅速ふ
よりて。種を蒔の時節もまよかをま里。まじおるよ
そま。本邦は時節ふていそんふも。四月は半より五
月は半ふ阿らるべし。

種を蒔といへども。たゞ地上ふうち散らしたるは
みよて。土を覆ふといふ事なけま。雀など此小鳥
ひろひ喰ひたるふより。自然生はたましたるなり。

其まき置たる二種はもの。芽を出せしより。其たけ
ちやのびる頃ふ及び。其間ふ野草の交り生じて。
植しもの。さそりとなるゆゑふ。其草は拔はつる事
有。これをちムンカルといふなり。されば前ふいふ草
を刈と。さの草を除くと。其まけをたひて阿まど
も。上ふ論ぶる如く夷人此言語をかま少くして。物と
か稱ていふ事はあるゆゑ。まの類もひとしくム
ンカルと此み稱するなり。本邦ふて禾菜は類を作る
ふも。おろぬくといふ事阿りて。蒔る種の一つふ叢
生したるをバ。其間をまのし。長し易うらん事ををり

りてぬきさる事など何れど。夷人此處るところハ。い
さくろさやうの事もあらば。唯野草などのそびこり
生さる事何れば。そまどぬきさるのみふて。其餘をた
い生じたる儘ふして。打立て置とも自然とよく生熟
さる事なり。

アユウシアマ、の熟さる時ふ及で。其穂をきらんぐ
為ふ。手ふ貝を付るなり。これをテケヲツタセイコト
クといふ。テケを手此事をいひ。ヲツタハ何ふといふ
にの字此意なり。セイを貝をいひ。コトクを附る事と
いひて。手ふ貝を附るといふ事なり。

爰ふ用ふる貝を。夷語ふビバセイといふなり。それ
と小刀と磨さる如くふ。よくとぎて手ふ附るなり。
凡穂をきるふ。ふ。是を用ひてきる事なり。決して
小刀よう此物。さづて又物を用ふる事何ら。奥羽
両國此うち。まれふハ穂をきるふ。右此ごとく貝採用
ふる事也。何るよしをいひ。

手ふ貝をつけて。アユウシアマ、此穂をかる事を。ウ
フシトイといふ。ウフシを穂此事。いひ。トイを切る
事といひて。穂をきるといふ事なり。もとより自然ふ
生じたるごとくふ作られたる事故。其たけの長短をひ

としからび。穂は熟する事もまゝ遅速の不同有りて。残らぬ熟するをちて収めんとするも。早く熟したる穂を實の落散るを有り。或る鳥などの為小喰ひ盡さるゝ事有りて。其損失殊ふ多し。去りる故小大概小熟するを待て。實は里小不同有る事。論せびして切とるなり。其切取しから及び根等。其儘小捨置たり。來年小至りてまゝ其地小植んとする時。それと抜去りて焼出つるなり。

此穂をきるはとき。ねよそ八月は半より。九月は半小ち有るべし。

剪採し穂を収め置事。プロツタシツカシマといふなり。プロと本邦小して。藏などいへるものゝ如く。是べて物を貯へ置所をいふ。

其造るさま。常は家とハ事かを里て。いり小ち床を高く引して。住居より引をふきこる所小造り置事なり。

オツタ。前小いふごとく。にの字は意なり。シツカシマと。大事小物を収め置事をいひて。藏小収め置といふ事なり。其収め置小ハ。サラエツプといへる物小入て置も有り。あるを俵はごとくになして。入置も

阿るなり。

サラニツプといへるもの。草ふて作る物なり。俵ふて
るといへるもの。多くハ夷地のキナといへる物を用
ふなり。此中來年此種ふなふべきをたくまへ置ふ
もの。よく熟したる穂をえらび。莖刈つけてきり。よく
たむ祓て苞となし。同じく藏ふ入置なり。

是ふてまづアユウシアマ、を。作り立る此業ハ終る
なり。さべて六れまでの事平易ふして。格別ハ艱難な
るさまなきやうふ見ゆまどをも。殊ふ然るふ阿らば。
夷人此境よろびの器具等も。あくるふまりせびして。

力哉勞する事も甚しく。又山野ふを晝廿間。蜂ハ或る
蚊蛇などの類多くして。手足をさし疥瘡のごとくふ
なりて。その辛苦をきかむる事いふむありなし。

ルシヤシヤツ、ケと稱する事あり。ルシヤとを葭刈
阿みて。簾のごとくなしたるものをいひ。シヤツ、ケ
とち。干し事をいひて。簾ふほふといふ事なり。是を藏
ふ入置する穂を。食せんとする時ふ及びて。藏より取
出て。簾ふ此せ圍爐の上ふて干し事あり。いなる故
ふ。いとま阿る時といへども。残らぬ春てそれを貯
一置といふ事ハ阿らば。穂たまふ藏ふ収め置て。食

事此たびごとふ。藏より取出し干して。それより春く
事をむな事なり。

春事をユウタといふなり。廣尾などいへる所此邊よ
り。奥此夷地ふいさりてむ。ウタとも稱するなり。是を
前ふいふ。圍爐のうへふてほしる穂を。そのまゝ白
ふいきてつく事なり。其つく所を常ふ小棟屋みて爲
事多し。

小棟屋を。夷語ふチセセムといひて。住居此かゝハ
らふ。小き建たる家をいふなり。

晴天此日なども。家の外ふ出てつく事をあるなり。夫

より箕むて簸事をイト、イトといふ。簸事をすまて。其
出たる糠を捨る事を。ムルヲシヨラといひ。又ムルク
タともいふなり。ムルを糠をいひ。ヲシヨラを捨ると
いふ事なり。

ムルクタウンウンカモイと稱する事を。ムルクタを
前ふいふごとく。糠を捨る事をいひ。ウシを立事とい
ひ。ウンを在る事といひ。カモイを神といひて。糠を
捨るところふ立て在る神といふ事なり。おれをアユ
ウシアマ、ト。ラタ子此一種を。神より授け給へるよ
し。いひ傳へて尊ひ重んぶる事。初めふ記せるが如く

なるふより。凡二種ふかすたりたる物を。聊うふても
輕忽ふせる事ある時を。かあらば神此罰をかうむる
よしといひて。夫より出たる糠といへども。敢てみど
うふせむ。捨るところを住居此かこはらふ定め置。イ
ナヲ残立て。神明此在る所とし尊みたく事なり。唯糠
のみふかぎらび。凡て二種此もの、朽るる根。あるを
枯たる葉。其餘二種此ものふ何づりるほどの器具を。
曰杵鐺椀より初め。爐上ふ穗を干し時の簾。あるを自
在等此物ふ至るまで。破損せる事あれば。ひとしく
是を右の處ふ捨置て。他ふ捨る事決してあらび。ことふ

其破達たる器具を。水を遣ふ此事ふ用ひ。及び水中ふ
捨る事など。甚ど思みきらふ事なり。

アユウニアマ、を煮る事を。アマ、シユケといふ。ア
マ、を穀食此事をいひ。シユケとも煮る事をいひて。
穀食を煮るといへるものハ。夷人の境いまど飯ふな
る事をばえらて。唯水故多く入れ。粥ふ煮るむりり此
事なる故。かくも稱するなり。又ラタ子を食せるを。汁
ふ煮て喰ふ事なり。其食せんといはるとき。トイタ子植
たきたるをほりとり來りて。

ラタネを。熟せといへども。一時ふ残らば掘とりて。

貯へ置といふ事をせむ。植たるまゝおてトイタふ
 おき。食するたびごとく掘出して用ふなり。但し寒
 氣をおもごしくして。土地の氷通る時お至れば。や
 む事成得ずして。みお掘出して貯へ置なり。
 それを根葉とおきりて。魚は肉とおれじく錨カお入
 れ。水とおて少しく鹽けおけるようお煮て食するなり。
 これをラタネヲハワと稱す。ヲハワとお汁は事とい
 ひて。ラタネをいれたる汁といふ事あり。
 おべて汁の實お魚を用ふる事。夷人お常食おて。ラ
 タネをお助けお用ふなり。おあるゆゑおいづれ魚

と雜へ煮る事おて。ラタネはお煮るといふ事を
 おらば。唯根は格別お大あるを。湯煮おなして食事
 此外お食ふ事あり。本邦おていもんおを。お菓
 子などお用ふるお如し。其汁は實お助けおなるもの
 を。ラタネ此外おを。海苔おるを草等お用ふる事あり。
 其草の數また多し。
 右おうち。アユウシアマ、おを。本邦の事お比してい
 んおを。お飯おごとく。ラタネおはほ菜汁等おおと
 きおおなれども。夷人のならひ然る事おさごめたる
 おを。阿らば。二つとおおいづれも。鱈食おなる事あり。

此等此類の飲食ふかゝる事多。専ら女
此夷人のわざとな事。本邦ふことなる事あらば。
夷蝦

○麻を作る事

勇拂。字クツチセ邊の畑ふ別了麻を作れり。同編卷六
器械の部ふ詳ふれば。就て見るべし。

○夷女畑作の事

空知太。セツカウレ此家の傍ふ。狸豆眉豆粟糲粟稗等
を作りたり。是皆黒唇の業れりと。彼等未だ鋤をもち
まゝ運上屋よりむ。彼方へ農業を教るを禁め有つ

故ふ。決して農具を渡さば。彼等鋤ふ横ふ柄を附
用ふとなり。石狩日誌

○キナ并厚子を織法の事

夷人此織ところのキナ席を太蘭^ナなり。太蘭を夷名よ
てキナといふ。其織法を夏月蘭を刈りとり。熱湯をか
けて日ふさらし置て。女此細ユふ織るなり。赤と黒と
ふ染分て織をアヤキナといふ。アツシ布を。オヒヤウ
此木の皮を五月頃ふ剥取水ふ漬し日ふほし。細^ホ
々さきより抜かけて梭ふ通し織なり。
谷元旦蝦
夷記行

○夷女厚子皮を製する事

婦人の旅行するも。不絶厚子皮を携へ口ふて和を
らげ歩行也。又ハ草刈其他何業もて休息此内也。右
の如く厚子皮を製する。縫仕事其他坐して出来べ
き業を好む。蝦夷雜書

○ツキサニ炭製し紡績する事

蝦夷本草志料。ツキサニ一名ニイカツフ。松前方言
ふチ、シタモ。此本草も載る榆の一種にして。其葉肥
大なり。夷人其皮を剥水もさらし。麻皮也如く紡績し。
織て布を作り。是を夷中此常服となすといふ。其朽た
る小枝をバ。蓄置て火の用となす。この火繩也といふ

し。鑽燧此火也。是よりとるといふ。其法を此大枝
を剝て孔をなす。細沙を盛み枝をちて頻もきしれバ。
木のづらら火炭發也といふ。周禮も司雉氏四時鑽燧
して。新火をとりて飲食此用となす。榆を百木も先だ
ちて何をし。故ふ春これをとると見えたり。され夷人
といへど。其人智此會するところかくはぶとし。此木
耳也ツキサカルシと云味美なり。即榆肉審餘今清商
つねも携到る 千島志料

○鮭鮓等漁業の事

天明丙午の年。蝦夷國界見分御用も屬きて。江戸本町

苦屋久兵衛と云者の手船神通丸。沖船頭太兵衛嚴命
よ因て松前よ着船し。夫よ東蝦夷地西別よ航海せ
しなり。蝦夷地東海の船路よく知たる者。松前家此撰
びよよりて。松前唐津内町の者よて。水先役次郎兵衛
乗組。西別と云大川よ着船也。此西別ハ例年秋の彼岸
よ至れば。川の源北方へ鮭夥しく溯るなり。予其役係
りなれば。渠等よ下知して。同年八月十七日。晝七時
頃引たる網よ。鮭三千足許り罹りしり。又翌十八日朝
六時よ引たる網よ。大よ羅る内。惡きを去り能く撰
みて九十九束あり。一束とよ百なり。去るとよ勝まで

小なると去り。勝まで大なるを去り。中なるを揃へて
良とせざる故なり。其中なる鮭大船よハ。凡五万足以上
を積を。松前家の定例とせざる事なり。日數凡五七日の
内よ捕る。是漁産の澤山なる証據なり。蝦夷草紙
生平以漁獵爲業。故弓矢不離身。獲之大利在海。三四月
鮭魚聚海灣。七八月鮭魚由海沂江。一舉網可得數千斛。
此其利最大者。方是時邦人亦多往而漁者。蝦性情且拙。
一日之獲。比較之邦人。大抵三分之一而已。但如捕。盟胸。
蝦中之絶伎。尤稱可觀。其漁之。以鎗刺之。海面飛舸相逐。
不及。則投鎗遙空。多不誤。鎗制幹首別挿。及長繩繫其父。

既中而幹脫。一條之繩。且任脰胸去向。伺力衰而曳之。其
鎗名曰敗奈禮。又設機于艸叢間。當獸徑。獸來觸毒矢。輒
發。名曰打一麻子勿。蝦夷風土記

○川漁ハ犬を使用スる事

石狩。字メムとて屈曲しスる小流。此涌出る所あり。こ
の邊の老婆。何モも駿犬五六疋を飼けるガ。其故を問
ふハ。鮭鱒等此川ハ湖るや。男夷ハ括テ捨テて突キも。老
婆ハ其捨ハ遣ヒ難キガ故。犬ハとらセと云フ。折能ク
も今朝ハ鱒鮠等多く湖リし故。是を一見せしグ。犬ハ
川岸ハ隱居ス。鱒川下より淺瀬ハ至るや。犬飛込テ直

ハ頭を咬テ持來リ。必ズ外ニ此處ハ疵を附ル事ナし。其
馴シらニ甚行義宜敷クものなり。依テ之此邊の老婆ハ。犬
を大切ニし我ハ喰ハる毎ハ。食を分チ與テ飼置ケる。
鮭漁の頃ハ一日ハ四五束ツも取獲トなり。石狩
日誌

○イシヨニをテ海豹を捕ルる事

唐太夷人海豹を捕ルるハ。イシヨニと云フものあり。其製
丸キ木を二つハ割リ。長二間ほどなるを七八本組テ
筏トし。碇を附テ海中ハ浮ベ。陸より四五十間も沖ヘ
置ナり。それより細キ木ノ目板ノ如キものヲ幾本も
繫ギて。其本ヘ昆布を卷キ。木ト見えザるやハ。陸

身を隠して。木此端を持ち居。海豹此筏へ上るを待
て。目板と昆布の間へ繩を通し。繩の端へ鮭鱒を突く
如き此釣を附けおき。海豹筏へ上れば。其木此筏の前
へ向を待て突き留るなり。是哉イシヨニと云ふ。邊要
分界

圖

○ヤスを以て魚を突事

魚をつくふハ。ヤスといふものをもちて。鎗此如くお
つらふ。常おこれをそあさび。其業甚上手おして。海底
おヤスをなぐるおと妙おして。何ららびといふ事お
し。大魚を一トヤスおてといまらぬ故お。追ひ突とて又

一本を投けて。突とめる事あり。北海隨筆

○牡父魚を捕る事

土人の牡父魚を捕るは。榆皮衣を川の瀬お裾を上お
し。肩下おして敷襟の所を持ち上居る。魚水お従て流
き来るや。水は兩袖よりぬけ。魚を背お留るを捕るお
り。其早き事恰お小石を拾ふおと思はる。其捕方城州
加茂川此鮭押と同理おして。彼を筵を二枚合せ其上
お追上捕る。是を着たる物を脱ぎ直おそれおて捕る
お。無雜作おして又奇なり。夕張日誌

○脛胸臍獵の事

膺胸臍を獵するを。長万部よりエトモといふ處まで。六ヶ場所。一場所ふ一艘二艘。まゝ三艘と極り有て。其所の役ふして。冬至より翌二月迄の内。海上波静おして穩なる日を撰み。其場所々々より極め通りの船數を出し。是はテハ船といふ。究竟の男夷一艘ふ三人宛乗組。大洋へ出櫓權を止め。煙草を吞む。至て静おして海面を守り居。いつ方より出る船も同様おして。汐風小流るる時。手を以て水をかき。獵場を離まざるやういとし居るなり。ある處膺胸臍を穩お乗じ。水上へ拾足も二十足も浮びつ躍りつ遊び居。頓て眠

を催し熟睡して。其中より一つ二つ汐風小流れ出る。夷人是を見つけ猶静おして。大躰七八間おもなれば。ハナレハナレといふハ。やまの事なり。

但夷語おハナレといふハ。やまの事なり。を以て。投突おして是は捕るなり。最初ハナレを附し夷は。勝負お夷と唱へ。夫より二此夷三此夷といふ。褒美お高下有。尤價も右お准じ分け遣は事なり。松田四六筆記

○キナンボー魚を漁する事
幌別白老邊お。キナンボーといふ海獸有是は漁して油お絞。則レメキナンボー油と唱へて出荷物なり。此

キナンボーといふ。形ち龜なり。大きあるも疊三疊敷。何るひち二疊敷も有。是を漁するも。夷舟にて夷人兩三人づゝ乗組。沖合へ出て。右キナンボー見附次第。ハナレを附て漁し。舟より引付置て。夷人どもキナンボー。此甲より乗。腹を割臍腸油も。此類。残らば舟より取入。夫よりイナヲを削りて。腹中へ入。其儘放つと云。一日より二つ三つも取獲。前の如くして放すと。右此キナンボー助命して。ふと度とらるゝ事有といふ。臍腸と抜きしもの。助命すべき道理なく。信用しが。さ々れども。夷人此語るを聞くも。二度め取らさしむ。

入れ置しイナヲの何るといふ。其上キナンボー油にて。出荷物よめる程の死骸。如何様此時化大波よても。一つも海岸へ打揚け寄置し事。昔より聞くと支配人番人杯をこれ云へり。不思議成事なれども。聞か。ふ爰よ記也。又勇拂邊よて漁するもの一種あり。是をイテングといふ。是則龜よて夷人食料と也。甲よきところ此形有て。磨上と鱈甲の如くなり。是を白鱈甲といふ。同上

○鰈鮫の事

松前志ふ。鰈鮫是尋常此鮫よりあらざ。此魚西部夷地天

鹽。勇拂邊より別て多し。方俗これを蝶鮫と云。菊花蝶形
顯然たり。當今此士人佩刀此飾とし其鞘より用ふ。美觀
よして又武用とせざるふ足きり。夷方是浅カリマとい
ふ。此物享保二年有台命。而呈上せしなり。夷人此魚胞
を以て。鰾膠とせざるふ其妙甚し。又一種シモクサメと
いふ有り。大和本草よりカセフカといへるもの。即これ
なり。千島志料

○漁獵時節の事

一 鮭を海より育て。秋に彼岸より子成うまんとて。川より
登るなり。鮭此最上を石狩増毛留萌。此邊を彼岸に

初より凡二回程して終るよし。一ヶ年ハ夫より遅
く。彼岸中頃より初め二回を取あぐるよし。いつま
も挽網よて捕るといふ。石狩川より南北方勇拂へ
川續き。此兩所鮭多く取あぐる由なり。
一 鱒を。冬至より蛸に餌よて。初め凡廿四五日も釣よ
し。まゝ鱒少き年を三十日餘も釣。共餌よても釣れ
るなり。根田内より白尻まで此場所を。鱒場所と唱
へ。就中假法華ハ鱒の最上の由。此處の鱒をもて獻
上し供は。

一 鱒を。國後擇捉鱒此場所よて。多分の漁獲あり。漁事

を六月中盛と云。多く土用入頃より取初め。三十日程も挽網ひて取あぐるなり。

一 鮭を。熊石村より石狩迄を。古來鮭此場所と云。春此彼岸前より初め。四月中頃迄引網ひて取揚るなり。まゝ夏よりかけて。中秋まで鮑煎海鼠の漁業をなす。或は昆布切りひ立廻る者も有なり。

一 鱒を。いつといふ事もなく。寄來次第ひ網を入き。取揚て油ひ絞るなり。干鱒を製せざといふ。大更鮭一鱒を。冬至より春とちひ釣。又濱和たる時。假法華ひてを。網ひても取ると云。いづきも巖石多き所ゆゑ。

一 多分ハ釣取る方なり。小口より大川まで。鮭を釣るなり。

一 カスベを。春の彼岸前後鱒餌ひて釣り。又共餌ひてち釣なり。

一 昆布を。六月土用前名主の鎌入をなしてより。一統採り掛り。七月中も採揚るなり。

一 鹿を。沙流會所の山より出るもの多く。秋より冬向許り。蝦夷人の業として獵せたり。最他の山も居るといへども。秋迄此間を海漁忙敷事故。此獵を止べき隙あり。又冬の皮ならでも毛抜て不用立故。此獵もせざるなり。沙流會所此山を。南面ひて暖氣故。

冬向此山一鹿自然と集來るなり。毛皮一枚代金一分程に賣拂ひて。一ヶ年凡三千枚を獲ちのあるよしも聞也。

一熊を擇捉ひて一ヶ年子十疋餘取よし。是又魚獺隙なき故。常は獵せど。又冬皮あらでハ毛抜て不用立故。取ざるあり。

一鷲鷹を地上に横木を設け置。其下に小鳥を縊り附置。挽網を雙置て。其小鳥をとらんと横木に止る時。網を引てとる。皆蝦夷人此業とせる所なり。
一干鮓を鮮魚をマキリ小刀にてききて。腸類をさり。

干立製せるものと。蝦夷人も和人も仕方を同じ方なり。松前秘説

一夷人此稼方ハ。男女共春を鱈を釣。夏ハ鱒漁。秋ハ鮭漁。冬ハ材木并薪を伐出し。又雪中鷲熊杯とるなり。漁業此間ハキナ筵杯を織るなり。

一毎年春に至り氷海解て。四月頃より夷人の内。得撫千リホイマカニルに渡海して。獵虎を取。七月頃歸國也。惠登呂府志

秋味漁業此時節也。彼岸に入。夫より土用中漁盛なり。其後蝦夷人共飯料の爲。川筋におひて勝手次第に漁

事止と。西蝦夷地場所ヨリ申上

○昆布をかる時節の事

昆布とり。六月土用より八月十五日まで採まら。續日本紀曰。靈龜元年十月丁丑。陸奥蝦夷第三等邑長志別君宇蘇彌菜等言。親族死亡子孫數人。常恐被狄徒抄畧乎。請於香阿村造建郡家為編戶民。永保安堵。又蝦夷須賀君古麻比留等言。先祖以來貢獻昆布。常採此地。年時不闕。今國府都下相去道遠。往還累旬。甚多辛苦。請於同村便建郡家。同於百姓。共率親族。永不闕貢。並許之。蝦夷土産

○冰海漁獵の事

天明六丙午年三月中旬。國後島北内イシヨヤト云所。お着船して。小屋をのけ野宿せし。其夜丑寅の風烈しく吹け。水主の蝦夷人共云ける。海上真白。お見えて氣味惡しと云け。何の故。お志らば。其夜明けて翌朝。お海上を見れば。遠沖より一面。お氷の山となりけり。其氷の厚さ五六間。乃至十餘間。或も二三十間許。お有りて。海上は氷面より五六尺餘。お浮み上り。水下へハ何程厚く氷りたる。誠にお堅氷山となり。此氷皆々北海より吹寄るときハ。大海更にお波

浪なし。因て通船はる事能とざれば無據滞留せり。土地の蝦夷人其氷より氷を飛移りて遙の沖へ出て海鹿海豹等を捕る事夥し。堅氷追日漸々解散へ赴く。北海獵を止て深山へ入てかせぐなり。赤熊の栖を見つけさきば主人イコトイウタレへ下知して赤熊を射留たり。皮を剥肉を取膽を取骨を捨て悉く料理して荷物へ作りウタレへ負せ。扱又彼跡へ子赤熊三足居たるを生捕て主従大勢深山より濱邊へ降りける時其体を彼大熊此皮と肉とを分ちて背負生捕小熊三足を引連き。蝦夷の例へて野宿小屋を造り向より

り聲をはり。ゴバキセとて。嘯嘯々々と云なり。ゴゴキセの聲高く聞えし。蝦夷女ども迎へ出て獲物の熊なるを見て野宿の假小屋俄に窓を開き其赤熊の首皮を尊信して此窓より入て上坐へ安置し。後我耳環をはづしく。彼赤熊は耳へかけ太刀を首皮の真向ふかざりて。いゝふを恭しく尊崇して敬ふ。蝦夷地の定例なり。其故を熊を靈獸なれば魂魄化して。蝦夷土人となる故なりと云へり。鹿肉魚肉等の供物をして尊貴の人へ對するが如く。恭しく再拜して。其後其熊の肉を供物へするなり。其故を尋る。魂魄を殘

るものなり。彼の肉を借りのもれなれば、心と骸とを別物なりと云り。此定例濟て眷屬此蝦夷人共打集り、肉を煮たり焼たり。生ふても喰ふ。熊の肉を食するも禮式あり。鹿肉狐肉等を喰ふとハ。大に別なりと云り。此振舞終りて頭骨を神靈に祭るなり。扱又其子熊をハ甚寵愛して飼置。成長の後、熊を殺して神靈に備ふるなり。是を殺すに禮式ありて殺し、其肉を喰ふて酒宴成なし。大祭禮を行ふに恒例なり。蝦夷草紙宗谷會所前海。成ふ向ひて、フサブの崎へ差渡。海上三里程。濱手通り陸を廻りてハ六里ほど有て、入灣ふか

りたる所なり。海上寒前より磯へ氷張る。厚さ一寸より二寸位なり。陸通りを一尺ほど張るといふ。春過東風吹て。唐太嶋の方より。山の如く氷一度、押來る。其時、宗谷より利尻迄十八里海上并禮文の方まで、海上一面、氷山のごとくなり。其時、氷の上、水豹乘居る故。蝦夷人ども氷の上ををしりて歩行。水豹を獵する。ヒカタ西南の風吹一度、氷下地斜里の方へ流送行なり。去亥の春、宗谷領のうち、サロル雄別トウベツ常呂。右四ヶ所の蝦夷三百人ほど。水豹をとり出。難風小逢て一時、氷ふうたれ。一人ものこらば死せしと。

尤右の水豹取ふ行とき。船に飯糧并薪水等を用意し。水の上へ船を引あげ。丸小家を掛。仮住居をなし。水豹みゆ。迷バ矢を放し。又をヤスといふもの。よて突留る事あり。夷諺俗話

○獸獵

○他郡山獵の事

山海の獵漁たるや。大略一郡或を二郡に分界あり。他の郡へ出稼するを不許と雖ども。山獵の如き。日高十勝兩國より石狩國へ。密々熊獵ふ至るものあり。去りれども。其地の土人これを見咎る事。よ於て。應接上

其皮を可受取權あり。無言よて決して取去る事なし。
蝦夷雜書

○桶もて狐を捕る等事

十勝の土人セツカウシ。一升入。油樽の古き。ら有し。を持來り。是。よ三寸釘三本を三方より打。裏の方。よ投置し。よ。其。夕方。狐一足を獲來りて。我等。よ饗しぬ。其。捕方。桶の中。油臭き。ら。故。嘗ん。とて。首を突込。や。釘を。首。よか。よ。抜ざる時。かく。ま。居て。打ころ。よ。な。りと。

南華主人のい。え。く。洋人。が。猿を捕んと。ま。る。よ。ハ。壺。よ。繭を塗。り。置。き。獵者。繭の。な。き。壺。よ。顔。を。入。れ。被。り。

踊りて見れば。野猴きたりて。繭の塗たりし壺へ。頭を入れてたごらんとするや。繭めて眼を閉ぢ。周章るところと捕ると。子一ランド 第二十九號その手段彷彿たるも。亦奇と云べし。十勝日誌

○夷女獸獵の事

蝦夷地のならひにして。婦女は業も鹿狐貂獺の類。犬もて驅出し獲まば。即其場も皮を剥ぎ肉を解きて歸るなど。野山を奔走するものと。男子も劣らぬと。らきなり。海上も船權を搔き山林も薪をこるも。皆婦女の持前なり。東蝦夷夜話

○穴熊を捕る事

夷人等冬月漁事終まば。深山をめぐる。穴熊あるも鹿狐獺鷲その他の獸。又海岸へ出て。海豹海驢等採捕るをもて生業となす。そと會所へ持出て。米酒麴煙草木綿糸針あどふかふる。これを狩物とりといふ。固より會所最寄も住居ある夷人。山ごもりハあきて。會所向此用事を達せ。されども狩物と云はれ申しつけらるまば。山も入りまじ。穴熊を捕らんとするも。二人或ハ三人つまたち。何れの家も平生畜おきたる犬此中も。強く逞き。或えらみて。五六足づ牽ゆき。山

中ふ分入了。熊此穴とおぼしき所をたしりふ見定め
おき。穴此口許へ丸木をもて横堅ふ柵を結ひ。志のし
て其隙より毒矢を射こむ。熊も穴中ふて吼怒り。口も
とへ出來り。結ひをらけたる柵を引除けんとして。お
のまがからへひくふ。丸木も上下左右ふ支へて。かひ
やる事うなをび。外面へおし倒れといふ智をあらぬ
ものなりとぞ。其うち矢ふ仕りけたる毒は。熊の皮肉
ふめぐり入り。弱る所を夷人も込み入り。急所を狙ひ
て打殺し。穴此外へ引ちく出るふ。まゝ死もやらで狂
ひ出るも有り。其時。牽ゆきくる犬。一齊ふ飛かきり

咬つあんとなほ。まゝハ矢傷急所ならで手負となり。
夷人を目ざして追ひ來るふ。夷人もあゝぞ一生懸命
此場として。頻ふ犬を驅りくる。熊も數足の犬ふとり
圍まき。あしらひ兼てゐるうちふ。夷人も其場を逃延
る。熊も人此姿見失ひてハ。ちもや追ひち來らばと
ぞ。夷人も固より驍健ふして。こまらごとたハ事とち
なさび。其時熊を仕損ちまを。まゝ他の穴を捜しちと
めて。竟ふを得ずといふおとなし。東蝦夷夜話

○鷲を取獲るの事

擇捉夷人の鷲をとるを聞けるふ。二月頃堅雪此節。深

山に入りて。雪穴を堀。木朶をちつて是を覆ひ。人形此不見様。穴中へ隠れて。其前へ餌を置き。飛翔此鷲此の餌を見て。一つとり餌を食して居る節。彼雪穴より是を窺ひ見せまして。曲鉤を鷲此足へつけ引取得るなり。此鷲此羽を下蝦夷地第一此狩物なり。熱多羅拂談りて交易をなす。鷲を奥蝦夷に多し。又石狩川此水源より。夕張といへる大山ありて。巨樹をげりて冬より春へ至りて。雪を積りたる時ならで。事なりがごとし。此山中へ鷲鶴など多く生みて。巢をつくるなり。此山へ

諸方より夷人ども。雪中へいたれば。雪け入て獵するもの。千餘人へおよぶといへども。さらへ其同行此ものより。外へ出逢ふものなしといふ。其山此廣大なる事。或るべし。北海隨筆

○夷家鳥獸を飼ふ事

シユマ、ツフ此夷家へ。熊を畜ふあり。又梟を畜ふ者あり。梟を養ふと云。此地の習俗の由。相傳へいふ。此梟生々此理を教へしこと。本邦へいふ鶴鴿の如きものより。子孫繁昌の基なりとて。愛養と云。録國千歳字シキウ村乙名此家へて午飯と云。乙名此名也。ヤ

ニゴロといふ。家も廣し。貝桶おど多く持たり。鷲は飼
たるあり。木は葉を四角に積。其内へ置。鷲の名をカハ
ツチリといふ。ヤンコロは家も。大刀五腰あり。古色甚
愛するに堪たり。谷元旦蝦夷紀行

○山獵に犬を使ふの事

蝦夷地の犬も。夷言にセタといふ。夷家ごとく犬を飼
置。山獵に出来る時犬を多く連行。熊を見請する時
矢を放つ。やがて其熊夷にりりへ飛來ると。犬もえ
かゝる。熊のうしろへ回り尻へ喰付故。熊も立戻り犬
とかみ合せる内。二は矢をばち。熊を射留るなり。

宗谷運上家も。五六疋飼犬有。其内老犬もて狐色好
る。犬もよくものどくむつるなり。何よても手ごろの
ものをくもへさせ。連歩行も志とびひ行なり。一体蝦
夷地の犬も人なれなて。白犬も一疋よくものどく
もへ歩行犬有。會所番人のうち。支配人長三郎倅長七
といふもの。右の白犬を連。宗谷運上家より一里餘。シ
ルシと云處へ行。歸りのせの道にて火打を落したり
し。其夕か。右は犬。火打を拾ひくもへて。運上家へ
持來りたる。且右の犬ども。越濱邊へ連出し。石をひき
ひて海上へ礫を打ふ。その小石は落る所へ。およぎ

行。又一つ外へ礫をうてば。まゝ其所へおよぎ行なり。
又予よよく馴染たる犬三疋有りて。外へ出まば付ま
とひ歩行。夷船に乗せて海へ出れば。やがて飛込船の
左右に游來。長き海上なれば。終るる犬も游草卧。息合
も苦敷様ふ成故。首筋を捕て船に舳先へ引上げれく
ふ。うれしがりて尾曳ふり居れども。身ぶるひとせせ。
身ふるひ曳せるとき。船中をまはご困る事ゆゑ。乘
合居たるものも。定めて身ぶるひをせせべきといふゆ
ゑ。犬ふむのひ決して身ぶるひをいたせんと。戯てい
ひふくめ置し。船に岸へ着て身ぶるひ曳せせ。い

も海をおよぎたる時。陸へ何おれば。是非身ぶるひ曳
せる事なる。船中ふて右のごとく。言含めたるを聞
分て。急度守りをる。誠ふ感さることなり。夷諺俗話

○鹿種類の事

松前志。蝦夷産の鹿ハ。悉く麋なるべき。方俗カノ
シ、といひ。夷人ユツクといふ。其皮ハ他國と交易也。
夷人好て其肉を食ひ。又其生體を吸食ふ。又希ふ白鹿
有りといふ。夷方白鹿を神となし崇むなり。古人此を
祥瑞此部ふ入れたり。これを仁鹿といふ。又日本紀よ
齊明天皇此朝。蝦夷を征伐何し條。夷人白鹿を唐

天子に獻せし事見えたり。又列仙傳に百年にして化為白鹿といふ。是希有此物なればなり。千嶋志料

○唐太夷産業の事

一 嶋夷の業と云るところ。海漁を蝦夷嶋に異なることなく。鮭、鱒、鯡其他雜魚を漁り。此魚殊に多く春分頃群集する處と數度あり。其時を海面一色に白くなる處と米淇淋如し。夷等其趣を見得て。是を漁するに纒網を以てり。其得ること甚多し。又夜中に火を點して。海岸に漁することあり。言會と云ふに聞一山獵を又異なる處となしといへども。獸皮を以て

山丹夷。或は滿州に交易すること。此島夷に專務と云るところなれば。男夷專ら是を勤むる事なり。一 ホイヌを獵する處と。本邦のそれと異なることなし。只木に横面を設け獸を得る時を。水に投ぜしむることなればと巧と云。

一 リキンカモイを獵する事。亦罌を設けて是を護る。一 トナカイを獵する事。熊獵に如く弓鎗を以てりと云。

一 狐を獵するに術を。枝木を建て其上に魚を掛る時を。狐魚を羨て木を攀ち上下する時。足此枝間に

さまれて終ふ得らると云。此他狐を得る此術種々あり。

一 瀬を獲るふハ。自發弩を製し河邊に置。獸來て垂糸此魚をひく時を弩おのづから發して。獸を得るなり。

一 グーアマと稱する獵器あり。是亦自發弩なり。山野獸路に設置て。熊狐の類を獲る。蝦夷嶋にありと云。此物と異なる事なし。
一 熊を獲る事亦蝦夷嶋と同じく。毒矢を用ふといふと云。其毒蝦夷嶋の如く。其効を奏せし。ゆゑに矢を

放つて是に中るといふとも。獸忽ち斃れざる時を。何地までも是を追ひ。數矢を放て是に獲る。北蝦夷圖說

○唐太夷産業に犬を使用する事

一 此島の夷。生産の第一事となすものを犬なり。貧賤此夷も。其失費に堪ざれば。是を養ふと云ふは。されども。富貴の者も。家々是を置ざるものなし。
一 一家養ふところ此犬。大抵五六頭より。十二三頭に至る。

是其用をなすもの。此他牡犬兒犬の類。絆養せざるもの猶多し。

其生平飼置所を庭砌ふ木を建横木枝結び。一犬毎は是を繋ぎ漫行せざらしむ。若其犬病する。又其精氣の虚脱せしもの。繩を解て隨意あらしむ。嚴冬積雪此時ふ至るといへども。皆かくの如く。別ふ牢を設る。あつを見ぬ。

一犬をして食飼せしむる事。其詳ある。あつと云らば。といへども。大抵一日中。一二度なるべし。生魚此肉を食せしめぬ。煮熟してニマムと稱せる木器ふ盛り。二三犬をして同食せしむ。然れども犬を放つて自ら食せしむることなし。其時を夷自ら絆繩を解

き。是枝曳て食物の所ふ至り。食し終る。此間杖を以て其後ふ立。其奪食咬啮する者を撻て。妄凌此あつなりらしむ。

一犬兒を養ふ事。繩を以て繋ぐこと。初此ことし。食餅も又同じといへども。魚骨を去る。肉のみ小く裂て。是を食せしむ。

一此他大犬小犬ふ限らば。撫育の懇到なる。あつと枚擧げべららば。實は小兒を養育するが如し。故は犬の夷を慕ふこと。亦嬰兒の母を慕ふが。あつと。晝夜其側を離る。あつとなく。夷等此側ふ伏さしめ。椀中

の物を分て是を喰しめなどする様々。實は禽獸と同居すと云べし。兒夷の嬉戲多く犬を弄し。人の兒を負ふごとく。衣中に入れて是を負ふ。犬兒亦晏然として衣中よりあり。是亦愛育の状を察するは足きり。

一 兒犬漸も長じて後。其猾猛なる者を撰て家狗となし。其懦弱もして用も堪ざるもの。或も牝犬は小懦もして。乳せしむべからざるも。此を悉く絞て殺て其皮を取り肉を喰ふ。一 犬兒漸も長じて後。甚しき淫犬を悉く陰囊を破り

て。その精を去ること。驪馬のぶとし。是其妄淫を禁し。其筋骨を強くせしむると云。

一 精を去るの方ハ。犬の四足を木も束縛し。又繩を以て其口喙を巻き。兩三夷是を擁して。動揺跋躍せざらしめ。一 夷刀を以て陰囊を裂き。其精を出して是を去り。直も繩を解きて是を放つ。犬痛傷は趣なく。暫時其刀痕を嘗め。忽然として走り去る。其後常も異なるおとし。然れども妄も是を去るも。何らば。天時を考へ其狗の生質を按して是を去る。若其截割は術拙なる時を。即死する者あり。故も此事も

熟練せざる比夷也。是を好むことを得ば。林藏其詳
 なる大とを聞ざれば。其方を述る大とを得ば。
 其用ふるところハ。艀を挽しむるを第一とし。又船を
 牽しめ。山獵を助く。艀船とも。其馭法大ハ巧拙あり
 て。拙なるものハ。漸く四五足此犬を用ひ。巧なるもの
 も八九足十餘足といへども。是を馭法。此島の犬を見
 る。其性本邦此犬と異なるが如く。物を挽く大と
 を悦ぶの性ありと云。艀舟ハ限らば挽しめむと欲せ
 る時。先犬を連繫して。立木ハ繫ぎ置き。
 牝牡ハ論なく。綱をつくる時ハ。忽ち前行して挽曳

以。故ハ三四頭を連繫する時。一二人ハ力以て
 留べのらば。故ハ木ハ絆以。
 装する此内。既ハ連挽する大と頻り。して。聲を發し
 跋躍以。装成て植木の繩を解を待ばして。馳出以。大と
 矢の如く。一艀七八頭をして挽去むる時。一日中十
 七八里を馳去べし。
 一馭術也。兩手ハ木杖を持て。艀の上ハ踞し。犬疾馳傍
 行する時ハ。トウ、トと云聲を發し。艀觸る處。河
 る時。杖を地中ハ刺して。是を留む。海岸の冰地を
 馳驅することなる故。碎氷まゝ其上ハ磊々とし

轉びたる時。船常々動搖れること甚し。故に暫時の間も。目を放ち心を安んずるのひまなし。一度其馳を誤る時。船忽ち轉覆して。其身雪中投し。氷上を傷るのみならず。船を何地へう行き。幸ふ木根。岩角などありて。其船轉滞して。如何程引といへども。行べのらざる處あり。あられれば。留る處となし。其幸ふして留りたるも。船を悉くやぶれ。積むところれものも。總て破却し。繩を衆犬の足ふまといひ。漸ふして追付。其處に至り得るといへども。是は修理する處と。容易此事あり。林藏時々犬を馭

して。みづから此艱苦を知れり。

一舟を挽しむるも。亦大抵如斯といへども。其心を勞はる處と頗少しといふ。

一多力猾猛なるものにして。能挽曳れ。おと馴れたる犬を。連頭お置て挽しむる。是を名付て前導犬と稱す。島夷此犬を擇むことを専務とす。此犬阿しき時。衆犬逸して其用をなさば。故に是を交易する處とある。其價大抵斧三挺より高價の者も五六挺に至る。

一島夷を近所へ行といへども。とらばとてころの雜

器ある時を悉く艦小積て。犬をして是を擇むこと
なし。犬弱く路難ふして挽得ざる所を。夷等助け引
て其所に至る。

一山獵ふ用る時を能猛獸と闘ひ。深山幽谷に入て諸
獸を追出し。夷等の助けとなるものと。枚擧はるるに遑
あらず。

一家狗此病みて死するものも。只其皮を取のみふし
て。其肉を喰むべし。北蝦夷圖説

唐太夷人も犬を使ふ事。内地の牛馬を使ふより巧
みなり。其犬を仕込ふも。初め狗子此時より。良犬と驚

狗とを相して。若干の代を以て賣買す。犬は陰囊を切
り去り。馬鞍繫ぐ如く。常ふ兩方一枕を立て。左右に繫
ぎ置なり。其舟を牽る。海鱸は皮を細く割て繩に如し。
是を夷言トナリと稱して。犬は頭へ結つけて。内地
の引き舟の如し。舟中より船頭夷人のみ乗りて。衆
犬を鴈行して海濱を走るなり。其制犬の頸間へ輪を
ちめて繩を掛け。四五足まゝ六七足も珠數つなぎに
連ね。牝犬一足を輪をちめて放ち行て。水先とな
さしめ。船頭夷人其牝犬を指麾すれば。牝犬則聲をな
して先たち走る。是を見て衆犬も隨て走るなり。凡

一丁ほどち行けば。牝犬又自聲をなして走る。衆犬も
た隨てカと用て走るなり。幾里此間も皆如此。海岸岩
の出崎も至れば。衆犬皆海中へ遊び入り。折旋して崎
を廻りたり。左にければ出崎の磯へ舟つゝあへて。進み
かさきが故なり。一日行こと凡七八里。犬は智も亦奇
なり。初め舟も駕せんとする時を。船頭夷人繩を手も
して犬を呼べば。衆犬もあ走り來て頭を揺し。尾を掉
り繩を受るを以て快とするものゝ如し。又唐太は犬
を内地宗谷へ渡して。試み物を牽かせるも牽らば。宗
谷は犬を唐太へ渡せば。能衆犬と同じく物と牽なり。

守重按ふ。北海道。女直邊ハ。皆犬使ふ事なりと見ゆ。蠻
書もその圖と載たり。土夷二八舟の輪船も立り
露西亞人アタムスヲロシア國もて。冬々雪橇も乘
りて往來す。橇も犬もひりするなり。犬も皆尾と陰
囊と切る。如此すれば精氣おとろへて強しと
いふ。邊要分界圖考
唐太ホロコタン邊。犬を飼ふ事蝦夷も異なることな
し。唯犬の氣象猛悍もして。他邦此人を見れば。猙獰咆
吼して喰ひ付んとするは勢あり。瘦て丈高しウシヨ
口邊の犬と同じ。鎖鎖を以て木も結付け置く。

犬と繋ぐる。馬の外繋ぎに如く拵へ。十足を一所につあぐなり。

此犬を舟を牽き。艚を牽く此用子備ふ。余等一日舟を牽かせん。おとを見んと。番人へ談じたる。番人其旨と夷人子傳れば。夷人早速承引し。前濱より引かせたり。其仕様を。夷船一艘へ夷人二人我等四人。外子犬を扱ふ爲め。附添此役夷ケラエ一人を載せ。

此役夷綱を手子取置て。犬を阿やつること。御國人書の馬を御さるお如し。土夷二人舟の舳艫より立て。舟と扱ふなり。

扱舟は舳先北方へよりたる處に横木より綱を出せ。其綱の先子先導犬と。

此の綱。長さ二十間許ありて。トッノ皮を用ひ。犬中子て尤強悍壯犬なる者を用ふ。

括里付。其本綱へ小綱を十一本。四五尺置子結付。夫へ犬と括里付ること十一足。先導犬共十二足子て。

先導犬は直行し。子犬は左右子行く。舟を挽曳せ。初めは徐々子引き出し。追々早く。遂子疾走すること箭に如し。

此緩急。御者ケラエ此操縦子従ふなり。

濱邊を奔ること十五六町。暫時に往來し。たゞ舟を海
岸を距る處と。水は深淺ふるよれども。大抵五六間三
四間を過ぐ。犬を始終水際を走るなり。

ケラエ曰。此節は犬を使ふ時節。殊に暑氣のせい
ふて。犬も甚疲るる故。行き止まりて一息をいませ
せ。戻り格別早くせんとの事ゆゑ。其通と申たり。

元は處に歸り。犬の括りを解き。外繫に入る喘猶急な
り。於是犬は鮭魚を與へ。夷人は清酒を與へて。聊其
勞を報いたり。觀國錄

唐太東部。タライカ。ヲリカタ邊に。トナカイといふ獸

あり。鹿の如くにして。丈け高く頸長く。腮は四五寸は
毛あり。班文あり。角を平めなり。此獸能く物を牽く事
牛馬に如し。雪中に夷人兩足へ橇を着く。其橇は木
にて巾六七寸長さ四尺許。鼻と反らして。裏へ海豹皮を
張る。左右は縁へ鯨骨を銜ひて打堅め。滑にして走
易らしめ。草鞋に如く。革緒ひて足へ結ひつけ。扱手
は棒を持て。左右へ互に突張り。舟の楫を取るに如
く。其身の帯より繩を出して。トナカイは頸に結つけ
牽らるるなり。一日雪中凡二十里を行べしと云。舟は
帆を持て走るが如く。瞑眩するほどに覺ゆと夷人云。

按子元志子。木馬之形如彈弓。繫足激行。可及奔馬。止可
 氷雪上行。と云。盛京通志子。外蕃鄂羅春其稜の地方。不
 産牛馬。多役鹿。以供負載。性甚馴。と云。清實録使犬とい
 へる也。又此類なるべし。邊要分界圖考。

蝦夷風俗彙纂後編卷四終

